

<法政今昔>廃墟からの出発

鈴木, 敬司 / スズキ, ケイジ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

63

(開始ページ / Start Page)

112

(終了ページ / End Page)

115

(発行年 / Year)

2001-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020156>

廃墟からの出発

鈴木 敬司

昨年、十月の初頭、法政大学創立百二十周年記念事業の一つ「開かれた法政21」と題した国際シンポジウムを聞きに行った。その節、初めて見たポアソナード・タワーの偉容に思わず私は声を呑んだ。驚愕の原因は、言うまでもなく天を摩するような巨大な白亜の建造物である。そして、これこそ、このシリーズ名「法政今昔」の「今」を象徴する存在ではなからうか、と思つた。

ところで、私が法政に入学したのは、今からもう半世紀以上も前のことである。その頃、東京の街は、すっかり焼け野が原になつてしまつていた。申し上げるまでもなく、それは、昭和二十年（一九四五）三月の東京大空襲を主因とする幾度かの爆撃に因る。法政のキャンパスも同年五月の空襲で大半の建物が炎上し、焼け残つたのは、六角校舎、新館、そして図書館だけになつてしまつた。情けないことばかり書き付けるように申し訳ないが、当時は、食べる物はないし、住むところもなかったのだ。都民の大部分が、焼け跡に棲む野良犬の生きざまに限りなく近い生活をしいられていた。その頃、私のねぐらは、新宿の焼けビルの片隅であつた。食べ物と言えば、区役所が、週に二度か三度、食料品の配給と称して、腐りかかったいくらかのさつま芋やとうもろこしの粉、それに若干の野菜を配ってくれるだけである。が、それだけでもとてもありがたいと思えた時代であつた。配給の報せがあつた日には、もんぺ姿の主婦たちや復員服を着たりした町内の人たちといっしょにのろのろと出かけた。だれもかれも空腹だつたのだ。その場合、大八車を引っ張るのは私の役目であつた。お目当ての配給所は、なんと、

今日では、ファッションナブルな感覚いっばいの化粧品売り場になっている伊勢丹の一階だったのだ。この変貌の事実が、果たして、今の若い人たちに想像してもらえらるだろうか。

敗戦後、私は上海の捕虜収容所で約六ヶ月間強制労働をさせられていた。が、その翌年、やっと祖国の土を踏むことができた。早速、上京して、法政の夜間部（高等師範部国漢科）に入学した。ところが、私たちは入学させてもらいはしたが、構内には授業を受ける場所がなかった。そこで、お隣の嘉悦学園の教室を夜間だけ借用させてもらい講義が始まった。その頃、学生たちは、教室が間借りであろうと授業が夜間に行われようと、そんなことは気にとめず、まことに満ち足りた思いで、毎日、せつせと勉強に励んでいた。その秘密は、当時、若者たちはだれしもが切ないほどの知的飢餓感を抱いていたからである。それにこたえるかのように、法政の高等師範部にはもつたいないほどの教授スタッフがそろっていた。近世文学の近藤忠義先生を筆頭に、古代文学の西郷信綱先生、中世文学の永積安明先生、近代文学には新進の小田切秀雄先生というように目を見張るような見事な顔ぶれであった。さらに、漢文学関係には、長沢規矩也先生や内田泉之助先生、国語学の白石大二先生など、そのうえ青年心理学の青木誠四郎先生、倫理学の石川謙先生までもお迎えしたまことに豪華な陣容であった。以後、新制大学への移行に伴って、高等師範部は、事実上、第二文学部日本文学科へ発展的に解消されたわけである。私は、二部の日文科にしばらく在籍していたが、間もなく一部へ転部した。

したがって、以下のトピックは、私が昼間部の日文科で出会ったいくつかの出来事への回顧談である。いつの間にか敗戦後の数年間が流れ去っていた。が、キャンパスには、まだ、お粗末な木造の建物が二、三棟ほど建て増しされたのに過ぎなかった。その頃、設立されたばかりの生活協同組合の売店に、後に講談社の編集部で活躍した級友の佐藤貞介くんがアルバイトをしていた。その佐藤くんは、苦渋に満ちた青春時代を共にした親しい友人の一人である。が、かれに関わる回想は後回しにして、まず、同じクラスの仲間のなかで色濃く記憶に残っている連中のプロフィールを紹介することにしよう。クラスと云ってもわずか二十数名しかいなかったと思うが、専門部出身の川崎守邦くんが産経新聞へ、予科から来た金子敏治くんがフジテレビへ、そして、同じグループの岡村忠一くんは毎日新聞へというように、ジャーナリズムに進出した諸者がいるかと思うと、松林賢二くんが東宝で、伊藤洪太くんが俳優座で、井上一彦くんが日劇ダンシングチームで働くというように芸能方面で活躍することになった者もある。もちろん、極度に悪かった当時の食糧事情に音を上げて故郷に立ち戻って行った者も少なくなかった。そして、地元で中学や高校の教師になった、と聞いている。

ところで、佐藤貞介くんにまつわる話題に入らせてもらうことにしよう。ある日、私が生協に立ち寄ると、かれは声をひそめてこう言った。「おい、現金収入の秘策を見つけたぞ」と。さらに、私を凝視しながら、「即金だぜ」と追い討ちをかけた。その秘策とは、「血を売りに行く」ことであった。数日前から授業料を払う金がないことを互いにこぼし合っていたからであった。私は、なんとか金策が着いたので行かないで済んだ。が、かれは決行した。私が見舞い(?)を述べると、いくぶんかやつれた表情をしていたかれは、虚勢を張りながら、「パンと卵をもらったよ」とだけ告げて立ち去った。当時は、こういう話はずしくはなかった。そんなことがあってから、数日後、岩波書店が、戦後、初めて哲学小辞典を売り出した。それを買い求めるための若者たちの行列は神保町の角から九段下のほうまで延々と続いた。そのとき、一緒に並んだ佐藤くんが、ふと、「学問も血で購う時代か」とつぶやいた言葉がいまだに忘れられない。そのがんばり屋の佐藤くんは、残念ながらもう十年ほど前に鬼籍に入ってしまった。

話題を新しいものにしよう。学部に入っていちばん嬉しかったことは、なんと言っても片岡良一先生の近代文学の授業に出られるようになったことである。だから、先生の講義だけは欠かさずに出席した。そんなわけで、卒論も先生に見ていただいた。タイトルは、「歴史小説論」、それに、『阿部一族』をめぐって、という副題を付し、一〇〇枚ほど書いた。

ところで、片岡先生は、いつも和服をお召しになり、こげ茶色の中折れ帽子を被って出講なさっていた。そのお姿は明治時代の文士を想像させる趣があった。和服といえば、漢文学の長沢先生も羽織袴に白足袋がよくお似合いであった。先生の日本趣味は徹底していた。大学の事務当局と折衝して、とうとう研究室に畳を敷かせてしまったのだ。話はいつの間にか大学院時代に移ってしまったようだ。私は、昭和二十六年に開学した新制の大学院の二期生である。あまり自慢できることではないが、修士課程にはウラオモテ四年間在籍してしまった。が、その恩恵(?)で、かなり多くの知己を得ることができたわけである。その時代に共に学んだ人たちからは、後に研究職に従事した人たちが多数いる。その走りとも言える人たちが、『平家物語』の学長になった田中喜一さんや古代文学の着実な学者として知られる阪下圭八さん(東京経済大)、あるいは、『平家物語』のみごとな現代語訳をされた中世文学の研究者杉本圭三郎さん(法政大学)、国語学のほうで地味な研究を続ける望月郁子さん(静岡大)などであろう。この『日本文学誌要』との関わりで言えば、田中さんは、早くも本誌の復巻第一号(一九五七年刊)に

すぐれた巻頭論文を書いているし、阪下さんはその号の編集委員の実質的な中心人物であったのだ。

この頃になると、法政の日文科には次第に活気がみなぎって来たように思える。この稿では、残念ながら、その詳細を伝え

る紙幅を持たない。そこで、当時の大学院での片岡先生の「演習」のときに起こった一つの出来事だけを紹介させてもらう。そして、敬愛して止まない片岡先生のお人柄を知っていただくと共に、後年、第二回近代文学賞を受賞した作家草部和子さん（旧姓大久保）の若き日のういいういしい姿も思い描いていただくことにしよう。

その日は、大久保さんがリポーターであった。報告を終えた彼女のふっくらとした横顔は緊張のせいか少し赤みをさしている。その報告内容に対する質疑応答が始まった。学生たちは繰り返し繰り返し質問や意見で、容赦なく彼女を攻め立てた。すると、今まで落ちていてまことに手際よく応答していた大久保さんが、なぜか急に黙り込んでしまった。そつと覗き込むと、黒い大きな目が涙でうるんでいるではないか。これはまずいことになりそうだ、そんな思いがよぎった。

「大久保さん、あなたの意見を聞かせてください」と、だれかが声を荒らげて回答を要求した。その途端、彼女がしくしくと泣き出してしまった。

それまでにここにこしながら学生たちのやりとりをお聞きになっていた片岡先生が、突然、凜とした声で、大久保さんに向かって、こうおっしゃった。

「きみ、泣くとはなにごとです。感情的になるとはもつてのほか。直ちにここから出て行きなさい」。

もちろん、当の大久保さんはすっかり仰天したにちがいない。が、われわれのほうも押し黙って、ただ、下を向いているしかなかった。しばらくして、重苦しい雰囲気小さな晴れ間が訪れた。さすがは大久保さん。涙をぬぐって、ふたたびディスプレイに参加してくれたのである。

この事件をとおして、片岡先生がいかに研究を深めるための論議を大切にされているかを、私は肝に銘じて思い知った。実は、この私も先生からたしなめられたことがある。学生委員であった私が、先生のところへこんなお願いに行かせられた。

「講義がたいへん高度でよく分からないから、その前提になるような文学史の解説をしていただきたい。すると、先生は苦笑されながらこうさとされた。「きみ、そんなことは学生諸君が自分ですればいいことだよ」と。

（すずき けいじ・一九六五年博士課程単位取得満期退学）